（郵便局認可）

（日曜日休刊）　（定價金二錢）

時事新報

第千四百八十四號

明治二十年一月十三日　水曜日
舊丙戌十二月二十日　（戊、寅）

日出七時十一分　入五時六分
月出午後九時廿分　入午前九時二十五分
潮午前七時五十二分　午後八時十五分
（西暦一千八百八十七年）

時事新報定價
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓
一箇年前金六圓
〇時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ發送スルモノニ限リ本文定價ノ外ニ一箇月二十六錢ノ郵送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金一行ニ付

	一日限	二日以上 六日迄	七日以上 十五日迄	十六日以上
一行廿四字詰	錢 八	錢 七	錢 六	錢 五
自一行至十行	錢 七	錢 六	厘 二	厘 八
自十一行至廿行	厘 九	厘 五	厘 三	厘 五
三十一行以上	錢 六	錢 九	錢 八	錢 五
一行ニ付	厘 八	厘 五	厘 五	厘 五

時事新報

日本の鉄道は外國の工師に委托せべし

世の文明開化と談ずる者多くい皆曰く學校興さゞるべからず教育勸めざるべからず風俗矯正せざるべからず衣食住改良せざるべからず警察嚴密あらざるべからず監獄增築せざるべからず陸軍增さゞるべからず砲臺築かざるべからず海軍張らざるべからず軍艦造らざるべからず曰く何曰く何として文明開化の度に際限なければ隨てこれと進むるの工風にも際限なく二十年來日夜唯文明進歩に苦心して未だ滿足ある地位に達するを得ざるは是非もなき次第あるべし蓋し文明開化い無爲にして得らるべきものにあらずこれを得てこれを進むるには人の身心の働きの頗る活潑なるものと要すること無論なりといへども先づこれに伴ふの金錢あれば何程活潑なる身心にても其働きを施すの道なかるべし左れば此や一國の文明ならんとと欲して先づ政府れ憂ふる所れものい歳入の不足なり一身一家の文明なかんとを欲して先づ一個人の憂ふる所のものれい囊中の空きなり錢囊盈ち國庫盈ちて而して後に始めて文明開化の事を談せんとい事として成らざるなく欲する物として得られざるあかるべし然るあ今日日本社會の實際と見るとは人々皆文明開化の喜ぶべきと知て日夜これを進むるの工風を求め其計畫の世に現はるゝもの千百箇あらずといへども此計畫と成るに必要なる錢と得るの工風とは至ては公と私に日本人の注意を惹くことの尙は甚だ周密ならざると見るあり日本人と唯錢を費す事れみを知て未ざ錢を得るの要を知らざるものといふべし斯る無勘辨者の集合体にして爭ふか眞成の文明開化國を作るを得ん其根に培はずして其葉と摘み其財源と深くせずして其費途を無限とし結局國と家とを身代限とせざるを得れば無上の僥倖ならんのみ

今や日本國の富を增加するの工風を求むるに其事固より無數として一二を限るべきとあらず或い稻田麥畝と廢るとをれに代ふるに桑園を以てし大に養蠶製糸の業を起すが如き或は內國低價の勞力と使用して世界普通れ物品を製造し大に海外の市場に競爭するが如ど或い世界の廣ど眼と配つて有無相通ず荷くも空隙ど乘ずべきあれば內外遠近別あく活潑に商略と運らして大ま貿易と營むが如ど何れも皆國家を富ますれ妙計よして此類の事枚擧に遑あらざる中にも特に今日に富國の至策と稱すべきものは鐵道布設の外に一事あるきが如ど抑も鐵道は一個獨立の事業としてみるを起し其營業上ま利益少あるらざるは申すまでもあるきことあるが斯く直接に鐵道事業者が收入とる利益の外に全國一般の農工商業ま及ぼと間接の利益ま至ては之れに幾十倍すべきものあるや知るべかゝず世界の輿論に鐵道を以て富國第一の要具と爲るは蓋し鑑定れ甚ざ正しきものなるべし然るま文明開化の進歩を急ぐに連れて富の不足と感ずるあと實に世界無比とも稱すべど此日本國ま於て從來鐵道事業れ甚ざ遲緩なりしは奇怪千萬なる事相にて日本人の無智と世界に表白する國の大恥辱と申ずべきあり近來少ま く氣運の改まる所ありて漸く鐵道事業れ進歩を見んとすといへども惜いかな平生の覺悟乏ま かりしがために目下鐵道の工師其人に不足を告げ金は幾年の後に在るや其期未ざ知る可らざるが如ど實況は國の文明富榮の爲め歎息の至りと云ふべきなり

鐵道れ大切あると知らざるにあらず前日に在てい是非もなま既に鐵道の大切なると知るも之を布設するの費用を得るの工風あきれ日あらんには是亦是非もなまといへども今日の如く日本人既に鐵道の大切なると知り日本人既ま其資金を用意しあがら唯日本國內に鐵道の工師ままといふを以て徒らに一刻千金の光陰と空費し幾年の後ま至り中込ミの順番廻り來りて僅に一年幾十英里の鐵道を布設し呉るゝの日あるを待つが如きは智者の事といふべかゝざるあり日本人にして果して速ゝ鐵道を布設し國と富ませ國を文明にするの決意あらんには何故に目下速に外國より鐵道の工師と雇ひ來りて之に工事一切を委托し思ひ立ちしと吉日として即日より工を起し一兩年と出でずして全國到る處鐵道無ど の地あらしむるの工風を爲さゞるや經濟學の法則ま於て日本工師の手に成りたる鐵道に非ざれば日本國の富と作ふずといふが如ど道理は萬々あるべかゝざるあり日本人は護國の要具とる軍艦を製造するに一切外國の造船人ま委托ま てれ ま安心し敢て橫須賀神戸造船所等の專賣權を細く永く保護せんと企つる者あし軍艦既に然るを得とすれば何故ま富國の要具たる鐵道に限りて外國人ま委托すべからざるにや鐵道の成る一日を速にすれば一日れ富を增ま少數の日本工師の手にて細く永く日本の鐵道を布設せんとし不幸にして鐵道の成る十年を遲くすれば空しく十年の富と減ず遲速增減國家れ利害明々白々たる此重要事件ま關して今日日本人の了見れ甚だ狹隘にして富を作るれ心の甚ざ緊切ならざるは我輩の甚ざ悅ばざる所あり

雜報

○朝鮮游覽日誌（昨日の續き）　非上角五郎

今朝鮮地圖を按るに兩道相擁して一大海灣をなしエルローシーの之に闖入す其中央尤も深く陸地に入るは內浦に在て北西を口にま海岸は北ま水原府領あり南に牙山浿川兩地あり此ほか京畿道に在ては陽城稷山各縣の飛地あり忠淸道ま在ては洪水の飛地あり此邊の府縣ま物產を積み出し貢米を運送し及各道船舶の輻輳する所とす朝鮮人い相傳へて云ふ在昔神人あり曰く朝鮮の地小ま民弱に且支那之に接ま て大且つ强あきば永く獨立すると難からん唯內浦漸く塡まりて全く陸地となるときは其勢力支那に勝ま獨立するを能はず神人云ふ所實に其效あり朝鮮い今日迄獨立するは申すまでもあるきことあるが斯く而して內浦兩岸は年々に突き出し在昔海岸今い山腹とある者少あからず云々又昨年人あり上書して朝鮮政府ま勸むるに內浦を堤防しく其內を開拓するとを以てせり其旨ま曰く玆に堤防を築くい甚ざ難からず而して堤防すでに成らゞ田圃を得ると極めて多く海岸は諸水流注するを以て灌漑の便を缺かず云々余は此上書を見るとき人ま語つゞ曰く政府果して此上書を採用せば其獨立の期限を速かにすべしされども現今政府の財力にては迎てもこれと採用せる能いずと余は眞に內浦に來つてこれを見るにはゝま堤防せるの說は朝鮮の如き工藝未だ進ます財力實に乏ま き國ま て は架空の妄言たるを信ずるあり さ ば此國の獨立はあ ま數千年後ま あるべ ど か夫ま然り豈に夫れ然らんや君民一致よく國家の經濟となさば內浦の有無は問ふに足らず神人一言何ぞ深く介意するま足らんや內浦は汽船ろの中流に溯るべきも兩岸共に碇泊の地なしされども今後外國貿易盛大に至らば その一處を擇みて外國開市の地と なすとならん忠淸慶尙及び京畿三道の物貨ハまゝに灘集するこを得べく現今釜山仁川兩港ま比するに寧ろ良好の一港あらん內浦の內部は分りきて兩灣をあす一は東に在りこれと雞頭浦前の入江とす一は西に在りその東北に在ると以て兩道は經界とす余い大尉一行と共に雞頭浦にて晝食をなし午後二時に及び小舟二隻を備ひ南西に向ふて入江を渡たれり此日午前は天曇り午後に至つて晴れたれどもやゝ寒く西新里にて華氏寒暖計は三十度を示ま安仲市にて四十度を示ま此浦にて四十五度を示しも風多く小舟動搖すれば海水人を打ち馬は驚きて躍らんと欲ま殊に寒く入江凡ろ十里を困難中に經過し漸く三頭浦ま着しまれより南東ま向ひ入江に沿ふて上ぼると五里にして貢倉に達すまれを牙山縣の地とす更ま七里にして牙山縣色に抵りしは午後六時三十分にて日暮れ道暗く京城出發以來の困難なりき三頭浦より貢倉に至る間はなは水原府の領地とな ま廣原とあす名づけて乞梅と云ふ乞梅廣原はもと海中なりしが漸々に突出して陸地となりしと云ふ渺々たる沃野ま して田圃よく開らけたり內浦の水原府に屬せるを以て此新地も亦た其屬領となれり余い以爲へらく南陽府すでに退潮れ說あり ま た八灘洞より發安場に延きたる廣原は余を以てあれを見るま海岸の漸く陸地ま ま れる者なり其故は山丘中地みるま砂石を以て成り所謂山土ある者多きま此廣原い黑色粘土のみ此黑色粘土はエルローシー海岸ま堆積せる者ま て南陽府の海岸及び乞梅廣原より內浦海岸いみあれ ま り且つ此廣原は岩石みな海中ま在る者と同ま く廣原周邊の山丘ま沿ふ所ま自から一列をなせりさらば京畿南邊より內浦海岸い漸々に海中ま突出する者と斷言して可なん

儲てエルローシーが黃土色と帶ぶる所以はあれと海底の泥土細末なるま偶々太平洋水の流れ來るに由り海水を濁らす者とせんか滑た他ま原因ありとせんま余は ま ゝにその判斷を下だす能はずと雖ども海水の多く粘領となれり余い以爲へらく南陽府すでに退潮れ說あり ま た八灘洞より發安場に延きたる廣原は余を以てあれを見るま海岸の漸く陸地ま ま れる者なり其故は山丘中地みるま砂石を以て成り所謂山土ある者多きま此廣原い黑色粘土のみ此黑色粘土はエルローシー海岸ま堆積せる者ま て南陽府の海岸及び乞梅廣原より內浦海岸いみあれ ま り且つ此廣原は岩石みな海中ま在る者と同ま く廣原周邊の山丘ま沿ふ所ま自から一列をなせりさらば京畿南邊より內浦海岸い漸々に海中ま突出する者と斷言して可なん

京畿道附錄

余はすでに本道を過ぎて忠淸道ま入れり本道につき概論せんま氣候い京城を標準とすべく即ち夏特ま熱く冬特に寒く霖雨はわが七八兩月ま涉りて凡ろ三十日と積終り八馬漢口の氷上と過ぐるは十二月より二月ま至り凡そ六七十日なり積雪は稀に二尺に及ぶとあり海水も亦た氷結それ ども その南海に面するを以て航海する能はざるに至らず十二月以後は山上常に白雪を見ると常とす一土地は山陵多く平地少あくその平地は田圃割合よく開らけ余ま旅行道筋と以て田地れ沃瘠を云へば粃一斗と播種ま て収穫粃の多少と見るま果川縣ま て最上ま四十斗即ち二石最下に十五斗水原府にては最上ま六十斗即ち三石最下は果川縣ま似たり南陽府にては最上ま三十五斗即ち一石十五斗最下は七八斗に至るまきを以て本道各地に比するに水原府は上の下にして果川縣い中の上南陽府い下の下なり又た田は概ね麥作を兼ぬるま能はず惟ま稻作のミ圃は綿作より豆作多くみあ麥を植ゆるに冬種春種和半するま似たり」山陵は水原府邑の傍近及な樹木なくたゞ故に薪ま由ると云ふ故に薪人は肉食の民と百匹ま過ぐ而して三二頭に必らず二三人とに各地ともに殺に なりし

査するに朝鮮人は肉食を殺す能はず獨悪房は屠牛場に上を殺す能はず獨地方にては殺に幾頭を屠るの限ま過ぐるを要す者は三頭毎に生の二枚い官定價ひ方を左齋よりなせまに更に支商人は迷惑少あ各地斗量尺につひ桝は米搗粃豆をあんま京城一升はわが一升八合七夕合五夕にして南陽內にその米桝に商賈互に通せに由り各地互ま同れに次ぎ果川縣ま は京城南陽兩地相して稍々下れり即錢一兩又たは一査するま當時此い專ばら當五錢而してその日本定し難ま一圓あ して算定すれ塡大ま高く一圓兩となれま

人民の階級ま言へ居り餘は常民吏校校と云ふろの割合は文武官員たるのかず專ら農業をそるま甚ざしく而口ま年々減少そるまれを信じたま但當り人民の出入多京城兩班の所有に料に就きて云へば は小作人に各々分舍のみあ貧窶と家族七八人ま ま ゝ ま ま ま